現代中国語における領属物に対する依存性
― 名詞述語文が成立する背景 ―

勝　川　裕　子

0.　はじめに

所謂「名詞述語文」が成立する要因については、従来、述語名詞が例(0－1)に挙げるような主語に対し密接不可分な一部分を表す名詞である場合(朱德熙1982)や、例(0－2)に挙げるような日付、曜日、季節、天候など巡回性のある名詞である場合(马庆株1998、陆俭明2003)など様々な角度から指摘されている。

(0－1)　她英国人。[彼女はイギリス人だ]／这孩子大眼睛。[この子は大きな目だ]／
　　这双鞋塑料底儿。[この靴はプラスチック底だ]／张三厚脸皮。[張三は厚顔だ]
(0－2)　昨天阴天。[昨日は曇りだ]／现在已经秋天了。[もう秋だ]／
　　明天星期六。[明日は土曜日だ]／今天中秋。[今日は中秋だ]

しかし、これらの指摘は個別的事例に対して分析するに留まっており、名詞述語文が有する根本的な表現意図や、当該構文が成立する統語的・意味的制約についての包括的な考察はそれほどなされていない。

また教学面においても、例(0－3)に挙げるような名詞述語文は例(0－4)“是”字句の省略形式――換言すれば、名詞述語文の成立背景には“是”字句が前提として存在するといった説明がなされていたり、単に口語性の強い表現形式であるといった記述が目立ち、学習者の誤解を招きかねない。そしてこのような説明は、例(0－5)のような名詞述語文において、“*这个人是圆圆的脸。”が非文となるように、“是”の挿入を拒否するタイプが存在することからも妥当性を欠いているのは明らかである。

(0－3)　这个人圆脸。[この人は丸顔だ]
(0－4)　这个人是圆脸。[この人は丸顔だ]
(0－5)　这个人圆圆的脸。[この人はまん丸な顔だ]

統語構造が異なる以上、これら表現形式が全く同一の意味機能を有しているとは考えられず、それぞれに何らかの表現的特質が見出されるはずである。本稿では、名詞述語

文が成立する背景に如何なる統語的メカニズムが存在し、当該構文が如何なる表現意図を有しているかについて、名詞述語文の主語・述語間に存在する領属関係に着目し、領属物に対する依存性という観点から考察を試みる。

1. “是”字句【A是B】と名詞述語文【AB】

1.1.“是”字句【A是B】における「属性規定」と「対象指定」

「マリは金髪だ」を記述の便宜上「AはBだ」とするとき、名詞述語文は【AB】、“是”字句は【A是B】と記述することができる。ここでAとBの意味関係に着目すると、“是”字句は「属性規定」と「対象指定」の二つのタイプに大別することができる。例えば、

（1－1）　张三是我的老师。［張三は私の先生だ］　＜属性規定＞
（1－2）　我的老师是张三。［私の先生は張三だ］　＜対象指定＞
（1－3）　玛莉是金发。［マリは金髪だ］　＜属性規定＞
（1－4）　金发的是玛莉。［金髪なのはマリだ］　＜対象指定＞

例(1－1)(1－3)はA(“张三”“玛莉”)が表す主体に対して、その属性(帰属、性質、状態など)の側面から判断、説明を行うのに対し、例(1－2)(1－4)はA(“我的老师”“金发的”)とB(“张三”“玛莉”)をそれぞれ「同一関係」で結びつけ、BによりAを指定、限定している。本稿では、前者を「属性規定」[1]、後者を「対象指定」と称するが、このように“是”字句が担う意味特徴は二つのタイプに大別されるのに対し、名詞述語文には「対象指定」機能はなく、専ら「属性規定」をその意味機能とする。従って、以下のような例では必ず“是”字句を用いる。

（1－5）　戴眼镜的人是我弟弟。[眼鏡を掛けているのは私の弟だ]⇒*戴眼镜的人我弟弟。
（1－6）　人类的祖先是猴子。[人類の祖先は猿だ]⇒*人类的祖先猴子。

一般に、「対象指定」の意味機能を有する述語名詞(B)は主語(A)が表す対象に対する限定性が強く、排他的要素を含んでいる。[2] 一方、「属性規定」は、主語(A)が表す対象の帰属、性状、特徴、状態などについて何らかの説明(B)を行うものであるが、「属性規定」であれば全て名詞述語文が成立するわけではない。

（1－1）′ *张三我的老师。
（1－3）′ 玛莉（一头）金发。[マリは金髪だ]

例(1－1)´(1－3)´は「属性規定」機能をもつ例(1－1)(1－3)から“是”を落としたものであるが、例(1－3)´は名詞述語文として問題なく成立するのに対し、例(1－1)´は非文となる。このような差異は何に起因しているのであろうか。以下では、“是”字句との比較を通じ、名詞述語文特有の統語的・意味的特徴を考察する。

1.2. 名詞述語文【AB】の統語的・意味的特徴

まず、例(1－7)と例(1－8)を比較してみよう。a)は“是”字句、b)は名詞述語文である。

(1－7)　a)　他是广东人。[彼は広東人だ]
　　b)　他广东人。[彼は広東人だ]
(1－8)　a)　他就是那个广东人。[彼があの(例の)広東人だ]
　　b)　*他那个广东人。

“是”字句の場合、述語名詞(B)が“广东人”であろうと“那个广东人”であろうと、共に成立するのに対し、名詞述語文では、述語名詞(B)が特定の存在を表す場合、例(1－8－b)のように非文になってしまう。例(1－7－b)における“广东人”は類別を表す総称名詞(generic noun)としてAを「属性規定」するため成立するが、例(1－8－b)における“那个广东人”は指示代詞により個別化された特定の存在であると理解され、表現全体が「対象指定」機能に傾くため、非文となってしまうのである。また、

(1－9)　a)　鲸鱼是哺乳动物。[鯨は哺乳動物だ]
　　b)　??鲸鱼哺乳动物。

例(1－9－b)のように主語(A)が不定の総称名詞である場合、かなり不自然な表現となる。このような「類型の説明・判断」はやはり例(1－9－a)のように“是”字句によって表現されるのである。以上の考察をまとめると、名詞述語文の統語的特徴としては以下の二点が挙げられる。

① 名詞述語文における述語名詞(B)は、類(class)を表す総称的な名詞であり、主語(A)の属性(帰属、性質、状態など)を類別する。
② 名詞述語文における主語(A)は、個別的な特定の存在でなければならない。

次に、以下に挙げる例文をそれぞれ表現論的観点から比較してみよう。例(1－10－a)は判断詞“是”を用いることから、「黒い眼ではなく、青い眼だ」といった類(class)の指別・限

定的意味合いが強い。インフォーマントの語感によれば、“那姑娘是蓝眼睛。”だけでも充分文として成立するが、表現の背景にはやはり“那姑娘是蓝眼睛，这姑娘是黑眼睛。”[その娘は青い眼で、この娘は黒い眼だ]といった対比ニュアンスが読み取れるという。一方、例(1－10－b)は「その娘がどのようであるか」というA自身の性状について、Aの身体部位である「眼」の属性(色や形、大きさなど)に言及することにより類別描写したものであり、例(1－10－b)の後ろにまだ文が続くとすれば、“那姑娘蓝眼睛，金发，樱桃嘴，简直像洋娃娃。”[その娘は青い眼に金髪で、おちょぼ口、まるでお人形のようだ]のように専ら主語(A)に対する性状描写が続くと考えられる。

(1－10) a)　那姑娘是蓝眼睛。[その娘は青い目だ]
　　b)　那姑娘蓝眼睛。[その娘は青い目だ]

木村1996や刘月华2001は名詞述語文には否定形式が存在しないことを指摘しているが、名詞述語文のもつこのような描写性を考えれば説明がつく。つまり、名詞述語文に否定文が存在しないという言語事実は、例(1－11)のようなヴィヴィッドな描写を専らその意味機能とする状態形容詞が否定形式をとらないということと相通じる。眼前の事物(ヒト・モノ・デキゴト)をあるがまま描写することと、否定は表現上相容れないのである。

(1－11) 他心里空空洞洞的(*不空空洞洞的)，什么也不怕。
　　[彼の心の中はぽっかりと空白状態になり、恐いものは何もなかった]

従って、名詞述語文が表す描写内容について反駁したり弁解したりする場合は、従来から指摘があるように、“是”字句を用いることになる。しかし、“是”字句で表現する以上、それは主語(A)に対する性状描写ではなく、限定性、指別性の強い判断文となる。

(1－12) 甲：那姑娘黑眼睛吧?　乙：她不是黑眼睛，是蓝眼睛。
　　[甲：その娘は黒い眼でしょ？　乙：黒い眼じゃないよ、青い眼だよ]

2.　名詞述語文の表現論的特質

2.1. 述語名詞(B)のタイプ

次に、名詞述語文における述語名詞(B)の統語的・意味的特徴について考察していく。前章では、名詞述語文における述語名詞(B)は類(class)を表す総称的な名詞であり、主語

(A)の属性(帰属、性質、状態など)を類別すると指摘したが、主語(A)の属性とは具体的にどのようなものを指すのであろうか。まずは、述語名詞の語構成に着目してみよう。

朱德熙 1982 は名詞述語文において、名詞性偏正構造が述語になる場合、① 名詞、或いは性質形容詞が“的”を伴わずに直接連体修飾語になるタイプと、②状態形容詞が連体修飾語になるタイプの二つに大別しており、前者は“是”を加えて動詞性述語にすることが可能であるが、後者にはそれができないことを指摘している。以下に挙げる例(2－1)(2－2)は① のタイプ、例(2－3)は② のタイプである。

(2－1)　这双鞋塑料底儿。[この靴はプラスチック底だ]
　　这件大衣皮领子。[このコートは革襟だ]　　【名詞＋名詞】

(2－2)　他圆脸，大眼睛，黑皮肤，结实的挺起了胸膛。
　　[丸顔に大きな眼で、色黒の彼は、しっかりと胸を張った]【性質形容詞＋名詞】

(2－3)　彬彬长长的眉，大大的眼睛，高高的鼻子，小小的嘴。
　　[彬彬はほっそりとした眉に、パッチリとした眼、高い鼻で、ちっちゃな口をしている]　　【状態形容詞＋名詞】

この指摘は、裏を返せば、名詞述語文において名詞が単独で述語になることは極めて稀であることを示唆している。[3] しかし、なぜ裸の名詞では述語になれないのか、なぜ② タイプは“是”を加えて動詞性述語文にすることができないのかについては言及されていない。また、上述のような語構成からなる名詞句であれば、名詞述語文が任意に成立するかといえばそうでもない。朱德熙 1982 は名詞述語文における主語(A)と述語(B)間の意味的制約について、「修飾構造の中心語が指し示す事物は必ず主語の表すヒトや事物と分離不可能なものでなければならない」[4] と指摘しているが、具体的にどのような関係を以って「分離不可能」とするかについては詳細には触れていない。確かに、例(2－1)(2－2)(2－3)に挙げるような例は、主語と述語になる名詞句の中心語との関係が「全体－部分」の関係にあり、分離不可能であることは容易に推測できる。しかし、以下に挙げるような例(2－4)(2－5)を比較した場合、主語“他”にとって“中国人”が分離不可能で、“中国留学生”が分離不可能ではないという事実に対しても納得のいく説明が与えられるべきである。

(2－4)　他中国人。[彼は中国人だ]

(2－5)　*他中国留学生。[彼は中国人留学生だ]

2.2. 名詞述語文における「分類」と「存在描写」

小野2002は名詞述語文を成立させる意味論的概念として、「分類」と「存在描写」という柱を立て、これこそが名詞述語文の最も根本的な表現的特質であるという興味深い指摘をしている。以下に挙げる例(2－6)(2－7)は小野2002からの引用である。

(2－6)　「分類」

原　　籍：他北京人。/我英国人。/他东北口音。
所　　属：我北大东语系(的)。/他文化部的，搞创造的。
時 系 列：现在四点。/今天23号。/明天星期二。
天　　候：今天晴天。/刚才还晴天呢，现在又阴天了。
属　　性：这孩子坏脾气。/张大哥急性子。/四川好地方。　　(小野2002)

(2－7)　「存在描写」

デキゴト：昨天夜里大风暴。/他肺炎。
解　　説：我从上海来的。/他九点到的。[5)]
様　　態：这孩子圆圆的脸，大大的眼睛。/这个人挺高的个子。
年　　齢：他二十岁。/他已经二十岁了。
存在事物：房顶一个老鸹。/窗前一片月光。
所 有 物：我们两个男孩儿，一个女儿。
数　　量：一人一本。/一本十五块。/一年三百六十五天。　　(小野2002)

まず、例(2－6)の「分類」について見てみよう。このタイプはそれぞれの述語名詞(B)において、例えば[原籍]の“北京人”について言えば“上海人・广东人・湖北人…”を、[時系列]の“星期二”について言えば“星期一・星期三・星期四…”を想定できるように、類(class)が構成するであろう「対比項」を容易に想定することができることが特徴である。さらに、小野2002はこの「分類」の基準について「ヒトや事物の“存在”に対して、本来的、生得的に関わりのある内包的標識」でなければならないことを指摘しているが、これはつまり、主語(A)が本来的に他と区別し得るであろうと考えられる属性(B)について、どれに属するのかを類別することが、名詞述語文の構文的意味であるということを示唆している。従って、例(2－4)で挙げた“中国人”は、ヒトがこの世に存在する以上、必ず備わっている[原籍]という属性であるため成立するが、例(2－5)の“中国留学生”は“韓国留学生・日本留学生…” のように対比項を想定することはできるものの、それが生得的な属性ではないため、非文となるのである。例(2－8)(2－9)も同様に解釈することができる。

(2－8)　这个人黄头发。[この人は金髪だ]
(2－9)　*这个人黄裤子。[この人は黄色いズボンだ]　　(朱德熙1982)

しかし、小野 2002 も指摘するように、「本来的に」とは生得的・先天的に A が備え持つ属性の他に、文脈内ですでに A に備わっていると想定されうる属性や、「他」が意識されるような対比的な文脈においては、「分類」の基準に対する制限が多少緩和されるという。対比という形式をとることにより、述語名詞(B)があらわす属性が「既に A に備わっていると想定される属性」として限定的に設定され、それが主語(A)にとってより本質的な属性であると理解されるためであると考えられる。

（2－10）他中国留学生，她日本留学生。
［彼は中国人留学生で、彼女は日本人留学生だ］
（2－11）这个人黄裤子，那个人蓝裤子。
［この人は黄色いズボンで、あの人は青いズボンだ］

つまり、例(2 － 10)において主語(A)は「留学生である」という属性が前提として設定され、その上で「どこの留学生であるか」について分類する、という文脈においては比較的許容されるのである。

例(2 － 7)の「存在描写」については、眼前にある、或いは話題に挙がっている主語(A)の属性の、主に数量的特質や個別的な性状について描写することを専らその意味機能としている。例えば、“他高个子。”[彼は背が高い]といった場合、“他”が先天的に有する属性“个子”に対して[高・矮]という対比項の中から類別し、描写しているのに対し、例(2 － 12)は状態形容詞“高高的”により、“他”のあり様を描写しており、例(2 － 13)に至っては、数量的側面からより具体的に描写している。例(2 － 12)(2 － 13)ともに、対比項を想定することもなければ、類別とも無関係である。

（2－12）他高高的个子。[彼はのっぽだ]
（2－13）他身高一米七五，体重八十多公斤。[彼は身長175センチ、体重80キロ強だ]

現代中国語において、性質形容詞が事物の類概念や恒久的属性を表す静的な形容詞であるのに対し、状態形容詞は暫時的変化に対しヴィヴィッドに描写する動的な形容詞である[6]ことを考慮に入れれば、名詞述語文において、述語(B)が対比項を想定し得、[名詞 / 性質形容詞＋名詞]の語構成をとるものは「分類」を、[状態形容詞 / 量概念を伴う語＋名詞]の語構成をとり、眼前にある、或いは話題に挙がっている主語(A)の属性をヴィヴィッドに描写するものは「存在描写」を表すという小野 2002 の指摘は統語的にも意味的にも関連性をもった極めて妥当なものであるといえる。

3.　名詞述語文における【AB】間の領属関係

3.1. 名詞述語文における【AB】間の意味関係

小野2002は、例(2－7)の[所有物]“我们两个男孩儿，一个女儿。”はAB間の親族関係を数と性別で表しており、広義の所有関係――本稿でいう領属関係と捉えているが、このほかにも例(3－1)のような例もこの枠に含まれるだろう。また、例(3－2)は「分類」の例であるが、“他”と“脸・眼睛・皮肤”の意味関係に着目すれば、述語(B)は主語(A)が表すヒトが普遍的に所有する身体の一部であり、一種の[所有物]と捉えることができる。同様に例(3－3)における“性子”[性格]は“张三・李四”の「性格」であり、これも[所有物]と捉えることができそうである。このように、名詞述語文における主語(A)と述語(B)の間には「領属関係」を見出すことができるが、主語・述語間に領属関係が存在すれば、任意に名詞述語文が成立するわけではない。例(3－4)のように、たとえ“苹果”が“我”の[所有物]であっても不自然な表現となってしまう。

(3－1)　我两个哥哥，他一个姐姐。[私は兄が二人で、彼は姉が一人(いる)]
(3－2)　他圆脸，大眼睛，黑皮肤。[彼は丸顔に大きな眼で、色黒だ]
(3－3)　张三慢性子，李四急性子。[張三はのんびり屋で、李四はせっかちだ]
(3－4)　??我两个苹果。[私はリンゴ二つ]

然らば、如何なる領属関係が名詞述語文の成立に関与しているのであろうか。本稿では、以下のような仮説を立ててみる。

領属先(A)にとって先天的・生得的に存在すると想起される領属物(B)が類別・描写の対象となる。従って、名詞述語文は領属先(A)がア・プリオリに有していると考えられる密接不可分な領属物(B)がどのような属性を兼ね備えているかを類別し、描写する構文である。

以下では、小野2002の「分類」と「存在描写」の概念を取り入れながら、この仮説の妥当性を検証し、領属範疇の観点から名詞述語文が成立する背景について詳しく考察していく。

3.2. 依存的領属関係

領属先と密接不可分な領属物の代表には、以下の三タイプが挙げられる。これら名詞群は、自らの存在が他者との関係(参照点)によってのみ規定され得る名詞であり、「他律名詞」もしくは「不可譲渡名詞(inalienable noun)」と呼ばれている。[7)]

① 全体－部分：(身体部位)手、足、髪、尻尾、眼、頭　など
② 本体－側面的特質：性質、特徴、感情、意識、形状　など
③ 人間関係：(親族関係)夫、妻、父、母、子、兄弟姉妹　など

領属物が手、足、髪など身体部位の場合、その領属先はヒトを代表とする有情物である。また、[急須－取っ手]のようにモノに対する構成部分などもこのタイプに含まれる。領属関係が①のような「全体－部分」の関係にあるとき、領属先にとって領属物は他者に譲渡することができない密接不可分な存在である。次に「本体－側面的特質」関係とは、性質や特徴などある事物(本体)が普遍的に兼ね備えている側面を指す。この②のタイプも、程度や内容の差こそあれ、それが原則として全てに等しく、且つ不可分に領有されているという点で不可譲渡性の高い領属物であると言える。また、父母たるには子女の存在が、兄姉たるには弟妹の存在が前提となるように、他律性の高い人間関係の典型として親族関係が挙げられる。この他にも、“老师－学生”、“师傅－徒弟”、“(男)朋友－(女)朋友”なども互いに規定し合う関係であり、親族関係と同様に③のタイプに含まれる。

上述の三タイプのような、領属物が領属先の存在を前提とし、互いに規定し合う密接不可分な領属物は、例えば「本」や「カバン」のような任意的(optional)な領属物とは統語的にも意味的にも区別される。以下では、実際にこれら依存的領属関係が名詞述語文の成立にどのように関与しているか、それぞれ具体的に考察していく。

3.2.1. 全体－部分

まず、領属先(A)と領属物(B)の意味関係が「全体－部分」の関係にある場合を考察していく。「全体－部分」関係において、領属先(A)が有情物(主に人間や動物)である場合、その領属物(B)には「身体部位」を表す部分名詞が挙げられる。人間や動物とその身体部位が先天的に不可分な関係であることは言うまでもない。例えば、人間に「頭」があるという状態は必然的なことであり、「頭がある」状態と「頭がない」状態は二項対立をなさない。「身体部位」が人間や動物にア・プリオリに所有されていることは、以下に挙げる表現例が不自然なことからも窺い知れる。陳述が情報価値を有するのは二者択一の状況になる時のみ[8]であり、ア・プリオリに領有しているものに対して、わざわざ描写することはなんら情報価値を有さないからである。名詞述語文において名詞が単独で述語になることは極めて稀であり、名詞、形容詞による修飾成分を伴う理由はここにある。

(3－5)　*这孩子眼睛。[*この子は眼だ]
　　⇒ 这孩子{蓝/黑/大/小}眼睛。[この子は{青い/黒い/大きい/小さい}眼だ]
(3－6)　*这双鞋底儿。[*この靴は底だ]

⇒ 这双鞋{塑料/橡胶}底儿。[この靴は{プラスチック/ゴム}底だ]

以下に挙げる例(3－7)(3－8)(3－9)において、述語(B)を構成する中心語“地”、“脸・眼睛・皮肤”、“脸・腮”は主語(A)“这间屋子”、“他”、“那小姑娘”の身体部位、もしくは全体の一部分であり、中心語(領属物)の存在は主語(領属先)にとって先天的に備わっているものであると理解される。だからこそ、例(3－7)では名詞“洋灰”、例(3－8)では性質形容詞“圆・大・黑”、例(3－9)では状態形容詞“扁扁的・红红的”による修飾成分を中心語(領属物)が伴い、述語全体で主語(領属先)を類別・描写するのである。

(3－7)　这间屋子洋灰地。[この部屋はセメント床だ]＜材質・類別＞
(3－8)　他圆脸，大眼睛，黑皮肤，结实的挺起了胸膛。
　　[丸顔に大きな眼で、色黒の彼は、しっかりと胸を張った]＜身体部位・類別＞
(3－9)　那小姑娘，看样子不过十六七岁，扁扁的脸，红红的腮，身体不高。
　　[その娘は見たところ16、7歳で、のっぺりとした顔に、真っ赤な頬で、背は高くない]
　　＜身体部位・描写＞

また、小野2002は、性質形容詞が“的”を介さず直接名詞を修飾する場合、往々にして名詞句全体で一つの充足した意味を表し、一つの属性表現になると指摘している。例(3－10)における“厚脸皮”は[厚い面の皮]という文字通りの意味ではなく、[厚かましい]という意味であり、例(3－11)における“大舌头”は[大きな舌]ではなく[呂律が回らない]という意味である。

(3－10) 他厚脸皮。[彼は面の皮が厚い]
(3－11) 这个人大舌头。[この人は呂律が回らない]

このように、[性質形容詞＋名詞]はときに文字通り表す意味以上の意味――隠喩的意味(metaphorical meaning)を表し、それ自身が独立した類概念になり得るのである。

3.2.2. 本体－側面的特質

例(3－12)における領属物[記憶力]が領属先[ヒト]に普遍的に備わっているように、「本体－側面的特質」関係では、性質や特徴などある事物(本体)が生得的に兼ね備えている側面を指すため、「全体－部分」関係同様、名詞が単独で述語になることは極めて稀であり、名詞、形容詞による修飾成分を伴う。

（3－12）*张三记性。[*張三は記憶力だ]
⇒ 张三｛好/破｝记性。[張三は記憶力が｛良い/悪い｝]

以下の例文における述語（領属物）はすべて、主語（領属先）が生得的に兼ね備える性質や特徴を表しており、それにより主語を類別・描写している。

（3－13）这个人高个子。[この人は背が高い]＜性状・類別＞
（3－14）这个人｛高高 / 挺高｝的个子。[この人はのっぽだ]＜性状・描写＞
（3－15）他北京人。[彼は北京人だ]＜原籍・類別＞
（3－16）今天｛11号 / 星期二 / 晴天｝。
[今日は｛11日/火曜日/晴れ｝だ]＜日付/曜日/天候・類別＞
（3－17）我今年28岁。[私は今年28歳だ]＜年齢・描写＞

本体に対する側面的特質には様々な領属物が想定される。例えば、例（3 － 13）（3 － 14）では“个子”[背丈]の側面から領属先“这个人”を類別・描写しており、例（3 － 15）では、ヒトが存在する以上、普遍的に兼ね備えているであろう[原籍]の側面から、領属先“他”を類別している。また、例（3 － 16）では、“今天”が領属先として提示されているが、後続する述語“11号・星期二・晴天”は「日」というものが本来的に兼ね備える属性として分類基準となり得る。例（3 － 17）のような[年齢]もヒトが存在すると同時に自動的に付与される属性であると考えられる。

3.2.3. 人間関係

（3－18）我两个男孩儿，我妹妹一儿一女。
[私は男の子二人で、妹は一男一女だ]＜親－子・描写＞
（3－19）他三个老婆，我两个。[彼は奥さん三人で、私は二人だ]＜夫－妻・描写＞
（3－20）李老师30个学生。[李先生は三十人の学生だ]＜教師－学生・描写＞
（3－21）??张三两个亲朋好友。[??張三は二人の親友だ]＜友人・描写＞

例（3 － 18）から例（3 － 21）における主語（領属先）と述語（領属物）はある種の人間関係を表している。このタイプは所有動詞“有”を補って動詞述語文にすることもできることから、極めて領属性の高い関係である。主語・述語間の領属関係が[親－子][夫－妻][教師－学生]のようなお互いの存在を前提として規定される人間関係の場合成立するが、上述の「全体－部分」関係（3.2.1. 参照）や「本体－側面的特質」関係（3.2.2. 参照）と決定

的に異なるのは、述語(領属物)を以って主語(領属先)を類別できないことである。つまり、密接不可分な部分や性質は領属先を類別する基準となり得るが、このタイプは専ら領属先が領属物とどのような人間関係にあるかを描写するのみである。

3.2.4. その他の領属関係

領属物には以上の三タイプ以外にも、所謂任意的(optional)な一般領有物がある。これらは名詞述語文の成立に関与しているのであろうか。以下の例を見てみよう。

(3－22) ??这个人挺好的成绩。[この人は良い成績だ]
(3－23) ??这间屋子新沙发。[この部屋は新しいソファーだ]

文脈を考慮しない場合、例(3－22)“??这个人挺好的成绩。”とすると、たとえ“这个人”と“成绩”の間に領属関係が存在したとしても非文となる。これは、領属物“成绩”が領属先“这个人”にとって本来的、生得的な存在ではなく、遇有的な領属物であるためである。これは、例(3－14)“这个人挺高的个子。”と比較しても明らかである。例(3－23)も同様に解釈することができる。

しかし前述したように、これらは文脈支持や対比形式をとることで比較的許容度が高まる。

(3－22)′ 这个人挺好的成绩，那个人不好的成绩。
[この人は良い成績で、あの人は悪い成績だ]
(3－23)′ 这间屋子新沙发，那间屋子旧沙发。
[この部屋は新しいソファーで、あの部屋は古いソファーだ]

対比という形式をとることにより、述語名詞(B)があらわす領属物が「既にAに備わっていると想定される存在」として限定的に設定され、それが主語(A)にとってより密接不可分な領属物であると理解されるためであると考えられる。このように、主語・述語間の領属に対する依存性が高まれば成立可能となる。従って、例(3－4)“??我两个苹果。”も“我两个苹果，我妹妹三个橘子。”とすれば自然な表現となる。[9]

4.　まとめ

以上、名詞述語文【AB】の意味機能及び主語・述語間の領属関係について、領属物に対する依存性という観点から考察した。本稿では、当該構文は領属主(A)がア・プリオリ

に有していると考えられる密接不可分な領属物(B)がどのような属性を兼ね備えているかを類別し、描写する構文であるということを論証した。領属先(A)にとって領属物(B)が想起しやすいか否か、先天的・生得的な存在か否かが名詞述語文の成立の可否を左右しており、領属物には主に領属先との不可分性の高い依存性名詞(全体－部分、本体－側面的特質、人間関係)が用いられることを指摘した。しかし一方で、依存性の低い任意的な領属物であっても、文脈支持や対比形式により、主語・述語間の領属に対する依存性が高まれば成立可能となることを指摘した。

＜注釈＞

1) 朱德熙1982:105参照。朱德熙は、本稿でいうところの「属性規定」を“成员与类的关系”(包摂関係)、「対象指定」を“同一关系”と称している。
2) これは、“是”を用いる様々な表現形式における、強調、限定、対比などの意味的特徴と無関係ではない。
3) この点については、刘月华2001にも指摘がある。名詞が単独で述語になる例としては、例(0－2)で挙げるような“今天中秋。”[今日は中秋だ]などがある。
4) 原文は以下の通り。“名词性偏正结构做谓语，中心语所指事物必须是主语所指的人或事物不可分离的一部分。”(朱德熙 1982:103)
5) [解説]については、朱德熙1982、刘月华2001はこれを名詞述語文に含めていない。房玉清1992は名詞述語文に準ずるものとして扱っている。
6) 朱德熙 1956の指摘による。
7) 依存性名詞の典型的な例として、他に方位詞が挙げられる。「前後左右上下内外……という限り基準となるべき参照物が存在しなければならない。」詳細は、杉村 1997参照。
8) R. ヤーコブソン著、田村すゞ子他訳 1973:3参照。
9) 小野 2002は、“这间教室三台录音机。”や“他们两个男孩儿。”の例を挙げ、述語が数量表現を伴う場合は、分離不可能性は文の成立に必要な要件ではなくなり、対比形式をとらずとも成立すると指摘している。

＜参考文献＞

房玉清 1992《实用汉语语法》，北京语言学院出版社
范晓主编 1998《汉语的句子类型》，书海出版社
木村英樹1996『中国語はじめの一歩』，筑摩書房
刘月华・潘文娱 2001《实用现代汉语语法》(增订本)，商务印书馆
陆俭明・沈阳 2003《汉语和汉语研究十五讲》，北京大学出版社
马庆株 1998《汉语语义语法范畴问题》，北京语言文化大学出版社
中川正之 1976「日中両国語における譲渡不可能名詞について」,『中国語学』223号，日本中国語学会
小野秀樹 2002「中国語における“分類”と“描写”―“名詞述語文”を成立させる要因から」，『未名』第20号，中文研究会(神戸大学文学部中文研究室)
R.ヤーコブソン著 田村すゞ子等訳 1973『一般言語学』，みすず書房

沈阳 1998〈领属范畴及领属性名词短语的句法作用〉,《句法结构中的语义研究》，北京语言文化大学出版社
杉村博文 1994『中国語文法教室』，大修館書店
杉村博文 1997「名詞性連体修飾語と構造助詞“的”」,『大河内康憲教授退官記念 中国語学論文集』東方書店
玉珏 2001《现代汉语名词研究》，华东师范大学出版社
张敏 1998《认知语言学与汉语名词短语》，中国社会科学出版社
朱德熙 1956〈现代汉语形容词研究〉《语言研究》第1期
朱德熙 1982《语法讲义》，商务印书馆